

深夜の雪

と

あたたかいガスだんろの火は

と

ほのかな音を立て

し

しめきつた書斎の電燈は

と

しづかに、やや疲れ気味の二人を照す

と

宵からの曇り空が雪にかはり

と

さつき窓（まど）から見れば

と

もう一面に白かったが

と

ただ音もなく降りつもる雪の重さを

と

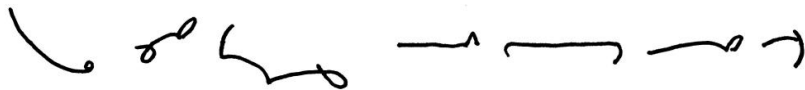
地上と屋根と二人のころとに感じ



むしろ楽みを包んで軟かいその重さに



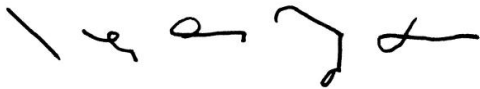
世界は息をひそめて子供心の眼をみはる



「これみや、もうこんなに積つたぜ」



と、にじんだ声が遠くに聞え



やがてぼんぼんと下駄の歯をはたく音



あとはだんまりの夜も十一時となれば



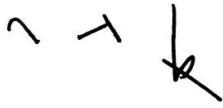
話の種さへ切れ



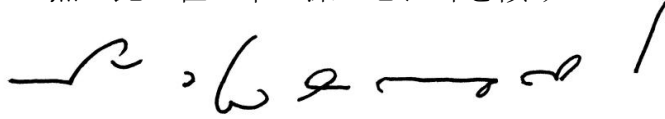
紅茶もものうく



ただ二人手をとって



声の無い此の世の中の深い心に耳を傾け



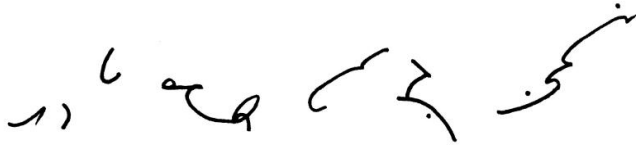
流れわたる時間の姿をみつめ



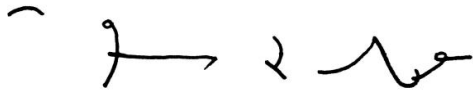
ほんのり汗ばんだ顔は安らかさに満ちて



ありとある人の感情をも容易たやすく受け入れようとする



又ぼんぼんぼんとはたく音の後から



車らしい何かの響き——



「ああ、御覧なさい、あの雪」



と、私が言へば



答へる人は忽ち童話の中に生き始め

〜 6 2
7 0 03

かすかに口を開いて

〜 8

雪をよろこぶ

6

雪も深夜をよろこんで

8 8 8

数限りもなく降りつもる

〜 2 2

あたたかい雪

2 2

しんしんと身に迫って重たい雪が——

〜 2 2 2 2